

「福音のためなら」  
使徒言行録 21:17-26

パウロ一行がエルサレムに着くと、教会の人々は喜んで彼らを迎えました。そしてパウロが語った神さまの御業に賛美しました。ところが、パウロの働きを快く思わない人たちもいました。律法に熱心な人たちでした。彼らはイエス・キリストを信じるだけでは救われず、律法も守らなければ救われないと考えていたからです。ヤコブは彼らから聞いていることをパウロに問います。「あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と言って、モーセから離れるように教えているとのこと」だが、それは本当なのかと。パウロはユダヤ人ではない異邦人に対して、割礼を初めとした律法の遵守は必要ないとは言っていましたが、「子どもに割礼を施すなどか、慣習に従うな」とは言ってはいません。これはまったくの誤解に基づく発言でした。

この背景には、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の間の根深い壁があります。ユダヤ人クリスチャンの少なからぬ人たちは、神の救いは、神さまに選ばれた神の民であるユダヤ人のためにあるのだから、神の民のしるしである割礼を受け、律法をきちんと守っている者だけが救いに与えると考えていたのです。ですから、神の律法も知らず、割礼も受けていない異邦人が、神の民として歩んで来たユダヤ人とまったく同じに、キリストを救い主だと信じることで神に救われる、というのは、受け入れがたいことだったのです。

ヤコブはパウロに反発を覚えるユダヤ人クリスチャンを納得させるために、四人の誓願者と一緒にパウロも律法に従って清めの儀式を受け、なおかつ彼らの誓願にかかる費用を出してほしいという提案をします。そうすれば誤解を解けると言うのです。

この提案をパウロは受け入れました。もし、これが救いの根本に関わることであれば、パウロは断固として従わなかったでしょう。けれども、救いの核心に関わることでなければ、彼らが大事にしていることに従ったのです。なぜなら、彼らをつまずかせないためです。パウロにとって、福音の本質に関わること以外のことならば、自分の信念のようなものはどうでもいいのです。そんな些細なことが人々のつまずきになってしまうなら、喜んで譲ったのです。

パウロはコリントの信徒への手紙の中でこう語っています。「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。」(Iコリ 9:19-20)

これが、主イエス・キリストによって与えられる本当の自由です。キリストのものとされ、神の支配に生きる時、クリスチャンは、他のあらゆることから解放され、何に対しても自由になれます。まことの自由とは、福音のために何でもできる自由であり、何とかして何人かでも救うために、自分の自由を捨て、奴隷となることができることです。福音に共にあずかるためならば、自分のプライドや誇りを捨てて、どんなことでもすることができる、そのような自由なのです。

イエスさまは、神の御子でありながら、すべての人を救うために、私たちと同じ人間になられて、御自分の命をも捨てて十字架に架かってくださいました。すなわち、まことの神であられる方が、神としての自由を捨て、奴隷になってくださったのです。私たちへの愛ゆえに、私たちを救うためにです。そのような主イエス・キリストのまことの自由によって、私たちは罪から解放され、神の愛の支配のもとで自由に生きる者とされたのです。私たちは、このイエス・キリストの姿に示されたまことの自由を深くかみしめ、感謝するものでありたいと思うのです。